



加々加

十三

1	5
34	
14	



圓正謂得巧といふ。

九月十三日夜月を多づ事

中右記小保延元年九月十三夜今宵雲浄月明是寛平
法皇明月无雙之由被仰出仍我朝以九月十三夜為明
月之夜

あつて

常美物産衣珠を小児の初ふ祖父のまへにあつてといふ事

宗祇法師の傳

宗祇法師姓中臣氏飯尾宗亮之子也其先世居紀州母
藤氏憂無嗣一百日祈玉津嶋神滿期之夜夢王子入于

口而姓十三月而生祇時應永元八年也祇自童卯好和
歌就叔父宗砌學習自稱種玉庵因母吞玉孕之瑞也上
京師心敬結草菴於岩倉之長谷亦好老莊自呼自然齋
文明三年訪東常縁親炙請益歌道常縁傳歌道之秘事
無所遺後祇謝返京又肆詩參禪後不定居處為薄萍客
遊諸國受祇之傳者省栢素純宗長宗碩等也文龜二年
七月晦日於相州湯本郵邸卒八十二歲葬于駿州桃園
定輪寺裁松于墓上

○ 文治元年四月神鏡神靈入所あり上卿八柱中納言經房參議也
文治元年四月廿五日神鏡神靈入所あり上卿八柱中納言經房參議也

宰相中の泰通、辨を少辨兼名、近侍の中、公時、於長、中、の範能、於
 長、の、將、と、ふ、壺、胡、録、を、節、せ、り、職、事、を、人、を、備、つ、権、佐、親、雅、を、供、奉
 一、き、り、四、塚、より、下、馬、し、て、各、歩、初、を、先、頭、中、の、通、資、が、素、向、し、て、行
 事、以、内、侍、所、内、務、寮、新、造、乃、唐、櫃、小、納、手、依、大、丈、尉、義、經、郎、等、三
 百、騎、を、お、具、し、て、前、初、を、後、又、百、騎、候、朱、雀、を、北、へ、行、六、條、を、東、へ、初、
 大、丈、を、也、へ、初、待、賢、門、小、入、朝、所、小、著、仰、あり、り、と、龍、人、を、備、つ、尉、橋、清、季、
 加、て、此、所、小、候、り、と、神、璽、六、海、上、り、浮、き、り、常、陸、小、位、人、片、為、右、命、經
 春、が、取、上、を、り、き、り、と、を、吹、し、り、曰、古、七、日、内、侍、取、初、至、官、廳、り、り、温、明
 殿、へ、後、し、奉、り、依、上、卿、參、議、辨、次、將、み、る、も、との、信、を、人、なり、り、色、
 三、箇、日、臨時、の、由、神、樂、ふ、と、ね、と、色、り、り、と、此、が、源、平、盛、衰、記、か、り、り、り

寶劔の事

法皇寶劔の失ぬきとて、大、小、の、缺、き、り、り、て、智、哉、大、明、神、小、七、日、の、素、
 身、七、箇、日、小、の、多、お、わ、り、寶、劔、の、事、長、つ、國、壇、浦、乃、老、松、若、松、と、い、ふ、海
 士、に、作、き、る、秘、法、を、一、と、こ、こ、小、り、り、て、九、郎、判、皮、を、召、て、此、の、事、を、作、
 會、多、く、依、義、經、う、ぬ、出、下、上、件、乃、二、人、の、海、士、派、を、も、老、松、若、松、を、
 女、あり、二、人、と、い、ふ、海、り、入、り、一、日、り、り、て、浮、上、り、て、中、に、や、う、怪、き、子、細、わ、り、
 取、り、ぬ、を、元、丈、の、力、小、及、び、如、法、經、を、書、写、し、て、身、小、ま、り、り、て、入、り、と
 中、に、小、り、り、て、信、を、初、つ、を、ぬ、法、經、を、書、写、し、老、松、若、松、を、ま、り、り、
 入、り、一、日、一、夜、上、ら、り、翌、日、午、刻、を、かり、小、浮、上、り、子、細、を、帝、乃、初、前、中、
 ま、り、り、と、い、ふ、か、り、り、て、都、へ、具、し、て、上、上、法、住、寺、所、小、於、て、中、に、り、り、龍

百練鈔小。文治三年七月廿日己未奉幣七社依寶劔御
祈也。今日被遣勅使於長門國且被祈謝為令搜索也。神
祇大祐卜部兼衡大藏少輔安倍泰成寺為使前安藝守
佐伯景弘去比下向景弘合戰之時在彼國存知寶劔沈
没之所云々。

貞和四年小西海小沈一寶劔出まわりの事

光明天皇此傳云貞和四年小元曆於長門壇浦小沈一寶劔出まわり
とて伊勢より進奏せしむる所云々。是ハ彼國の圓成といふ傳大抵去へ千
日系傳をききしが千日小備言をよりま海上より老物きて圓成こを
を得て尺餘小二尺五寸此劔也。其時十二之むらぬ童小神話ありし。

三種の神器の中此寶劔といひらるれを祭主神人等連署の
記法をきくかの書成これを持て上京一日野村大納言資明下つぎ
て。この宝劔を資明の孫平賀社の神主小助宿禰兼負を召て三種神
器乃由來代委くしむる。おまもる人より信せしむる。是ハ兼負を
して三十七日祈誓せしめ此劔をきくかの宝劔ありといふ。此の劔はま
まに告給ひて人の疑を去て奏聞せしむ。祈法せしむ。其時在長門督
直義がたはまふ。奇臨ありし。ふりていふ。宝劔ふまはせり。やして
此より仙回へ奉りて。まもり給へり。給ふ勸修寺に納経あり。これに
て寶劔執奏せしむ。まもり資明が阿黨乃より給ふり。事あり。百六十
餘年ある。後世者徳乃はせんふ。おまもり。宝劔の今か。おまもり。

かりりれど、船のやど文とせねど、ふた門より出つてゐるふきもむ
ろくろれぐさきふ、ゆきうふ人志ぎく、びくふざりく、れをぬあ
ふか、位も終ももきうつ、こよねくて、えきむらうちねき
くふ、系といへど、おべて、いかく、と、つ、ぬを、此、四條、大坂、あや、ハ、お
か、ぎ、り、あ、く、ね、き、つ、り、り、る、天、の、下、三、さ、ろ、ろ、乃、大、坂、の、中、お、い、り
大坂を、つ、ま、り、ん、の、ゆ、き、う、ま、く、ら、う、が、う、に、を、よ、れ、か、い、の、ふ、き、な
ひ、う、て、い、ろ、ろ、の、社、と、寺、と、ね、ど、た、け、う、つ、ろ、お、ち、く、思、ひ、あ、い
く、も、あ、う、と、ま、え、ろ、物、き、う、う、お、ま、う、の、の、み、や、び、う、ね、ど、ま、下
ふ、ま、あ、い、ほ、き、置、い、い、い、ど、系、を、お、き、え、お、か、と、な、る、を、り、と、

鴨河を掘りて

外記局日記、康治元年八月廿五日乙酉云々、近日依院
仰被堀鴨河、大炊御門諸國、吏各進役夫、是白河御願寺
等、為防水害也、民部卿顯頼、卿奉行此事、同年九月
二日辛卯、從昨日大雨、去曉以後、大風、河邊、民戶多、以流
亡、日來所被堀之鴨川、淵變為瀬、徒費役夫、已無所成、

鳥羽法皇崇徳上皇熊野幸御出立、
同記、同二年二月五日壬辰、今日兩上皇、令參詣熊野、
給宣、剗御進發、推僧正覺宗、為兩方御先達、法皇白布御
淨衣、同頭中、給小袈裟、令持御杖、給上皇白生給御淨衣、
狩衣、脛中、藁履、御杖等、推中納言藤公能、卿參議、同教長、

朝臣扈從上皇御共云々三月四日辛酉兩院自熊野還御法皇不令參稻荷給直入御鳥羽殿去比法印圓行入滅若依件夏欵件人雖稱白河院御子頗有疑殆云々晏駕之昔有議不籠御忌云々上皇令參稻荷給畢云々是所云々入らせ給ふ候もやまきそるべし興福寺維摩會講師の請同記小同年五月廿六日云々又被下維摩講師宣旨云々傳燈大法師位仁圓年薦法相宗專寺攝政宣件大法師渾仰綱所令請定當年維摩會講師者康治二年五月廿

六日大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

筑紫乃觀世音寺燒亡の事
同記小同年七月十九日云々今日尤大臣召外記下給太宰府解可勘例其狀云去六月廿一日夜觀世音寺堂塔迴廊燒亡件寺是都府之大廈天智天皇以後元明天皇以往五代之聖主相續草創之御願也五百餘年之間奉祈國家不退靈驗之砌也但於塔者康平七年五月十一日燒亡中尊丈六金銅阿弥陀如来像在猛火之中尊容無變昔自百濟國奉渡之云々

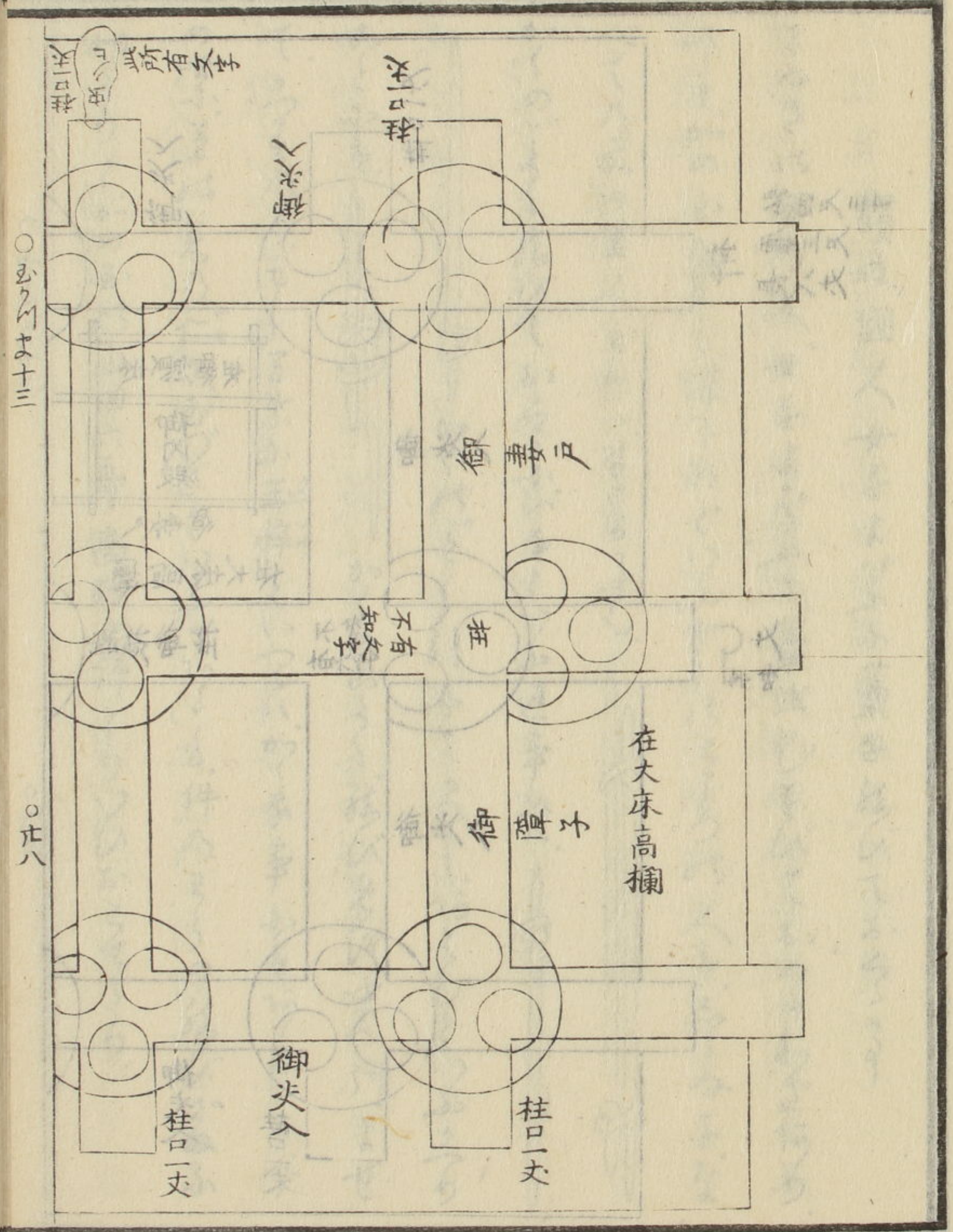
同記小同年十一月廿八日庚辰云々今日被立八十嶋
祭使御乳母典侍藤原家子故家政卿女行装之儀世以
為壯觀藏人頭右近中將藤經宗騎馬送之依為目縁也
藏人右近將監藤隆憲為勅使發向典侍用唐車唐車云々子
族等皆前駢布衣也
六角堂燒亡
同記小同年十二月八日庚寅云々丑剋六角東洞院有
炎上火出隆季朝臣宅六角堂為灰燼但觀音靈像奉出
了件像上宮太子隨身持佛也昔奉懸多羅木今在堂中
云々

鳥羽の勝光明院の寶物の事

久安二年八月廿三日庚申是日法皇御覽鳥羽勝光明
院寶藏所納寶物即有被書目錄事件目錄先年白川御
所炎上之時燒失也顯密之聖教古今之典籍道具書法
弓劍管絃之類皆是往代之重寶也今日書小石より
みちのくは宝蔵をささるはるさ二丈ありけり
又曰玉は津波の弘前の二里ありけり
大日進はあまの林の中へ一本は一本は十餘丈を
かりけり

出雲大社乃の事
出雲大社建久の事。藤倉より。藤倉小課役をわが
きて。改免造らる。後又嘉禄乃了。先の例ふらりて。課役をわが
せ。造らるとむとせ。小。伊殿の柱。中らひのむ。つ。是。居
大。煩。物。朕。非。素。意。若。人。帰。德。栖。高。木。足。と。云。國。造。出。雲。后。政
孝。國。司。右。馬。つ。尉。昌。綱。守。護。佐。々。本。信。儀。右。司。春。長。と。云。乃。儀。已
了。官。家。ふ。や。ま。さ。さ。さ。バ。藤。倉。北。條。つ。つ。藤。倉。き。何。や。一。み。て。官。庫
の。金。穀。を。出。し。て。造。了。なり。て。乃。是。乃。課。役。を。バ。停。ら。と。云。と。云。を
云。ふ。中。ら。ひ。の。託。宣。と。い。つ。り。伊。殿。の。家。記。ふ。さ。せ。り。と。子。家。傳
主。出。雲。宿。禰。俊。信。の。もの。う。ら。り。し。俊。信。を。今。乃。國。造。の。叔。父。と。宣

長がまへへふしのりねが此る海等ていそく。北條が課役をやめ。官庫
乃物をわして造。をわ。い。と。よ。し。も。と。り。ね。わ。さ。き。と。禰。な。り
し。と。い。は。忠。喰。の。託。宣。ハ。後。吾。人。乃。傳。言。ふ。し。て。神。の。心。を。一。つ。り。し。は。
右。事。記。の。上。也。又。案。仁。は。を。ね。ふ。此。大。神。の。中。に。始。つ。は。言。の。ま。と。い。つ。
人。の。し。め。ひ。さ。さ。バ。し。し。は。は。託。宣。を。そ。の。う。北。條。ふ。へ。つ。ひ。て。造。了。
こ。こ。ろ。を。わ。が。ゆ。と。ま。ま。て。神。の。心。を。かく。佛。聖。人。と。同。じ。お。も。さ。る
ま。む。と。さ。る。ハ。後。吾。人。の。心。し。又。は。大。神。傳。文。を。も。か。ど。り。作。り。ま。ふ
か。ど。ね。ら。む。む。朕。字。也。非。富。の。上。か。つ。も。拂。さ。了。と。い。つ。く。を。く。ら。也。
同社金輪の造言也圖
出雲大社。神殿の事。上。右。の。ハ。三。十。二。丈。わ。り。中。右。の。ハ。十。六。丈。わ。り



○五ノヤ十三

○五ノヤ八

引橋長一町

今の昔のハ八丈に在りし時の圖を、金輪カナワの造營此國としりて、今も國
 造の衆も傳へむらり、その國をふさぐもがや一。
 此國千宗國造此衆も、
 寫し取しり、んぬぬとの、
 今乃佛殿も、大く、
 構ハ、此國のおく、
 らぞ。

信濃の或村乃神事ふうふあ
うる人のいづくまのふれ大新川乃の上り川村和田ま
まねどしお里乃神事ふ湯釜ふ湯をわうとせせてその
えらりふ幣を立あきて、取ふきくまの釜のほりふ里人男女
老より少きうちやうとついでその幣をとり持ていづくま
おゆえまらきたまふみくまこくそくやうとふのふとく

嵯峨天皇四十御賀

類聚國史ふ天長二年十一月己巳朔丙申奉賀太上天
皇五八之御齡白日既頌繼之以燭雅樂奏樂中納言正
三位良峯朝臣安世下自南階舞群臣亦率舞云々

諸國小社の祓宜祝の事

貞觀十年六月廿八日の格ふ天長二年十二月甲子符傳
兼前之例諸國小社或置祝无祓宜或祓宜祝並置舊例
紛謬准據无定加以或國獨置女祝永主其祭右大臣宣
旨自今以後祓宜祝並置社者以女為祓宜但先置者令
終其身者三代実録小貞觀七年五月廿五日是日
制五畿七道諸神社祝部停補白丁以八位己上及年六
十己上人充之先是置者令終其身自今以後立為恒例

越前國史ふ荒道山

類聚國史ふ天長九年六月己丑越前國正稅三百束給

作彼國荒道山道人坂井郡秦乙麻呂と見ゆ古書に愛發
関とつるハハ荒道山にてそとふつちとよむ今もつち地名也
十
道遙院大良女きぬづき月記の跋ふ事についでお中お終る長壽
といふ此の了後とありていふやまよまぬ事たりやうかあはるも
いふ所ぬ乃ゆらけむいふがつりけきもいふ也
奉号月日波おやあきやうき例
源為憲の天禄奇合乃跋のそちとふ天禄といふ年をいふありて三
とせ乃ぬ乃ぬをある月也ふもは十日ふつるあつあき其のすえと
くもりそいふゆりていふこ又いま二日あきていふ也

童蒙抄のち面おての月形をえりもねつとをを成ぬ乃人
和壽の何とあがごとと難づく成言がうはうけとバえうび
おつとつりとまいふんちおは河をがうりえうび
綺倍おふおく山乃あつてはあこの神形とやあひのかふぬとぬ
とあへを同條大綱をえ格ふ本おゆりも書の高るをあつちと云こ
ぬをいふいふいふ
何おう天徳を合おむをいふはうはまふまうくハ家あ
くはくと申替がらうもあはおせあ大長判をあてよるまふぬを

とまとしてそいへて此をまふ判ぢくせり此判を乃
難とまてぬをよむといふべきまをよむといふまをむぐといふや
物とばたぬまをよむとせり又よまぬをよむといふまをむぐを
よむといふまをよむといふ乃難と物とばたぬまをよむといふ
乃難と物とばたぬまをよむといふ乃難と物とばたぬまをよむ
のたぬ物とせりよまぬのやむといふ乃難と物とばたぬまをよむ
福とぬ色

吉部秘訓抄云文治四三二同記云云心喪色有輕重
嵐色鈍色諒闇之時又練色淺黄等同以通用欵とよこ

きりぬ色みまぬ色ふてかりつかて保もものほきとんや
まふびとんやぬし諒闇之時云ハ當時一種鈍色といひ名
はきて諒闇之時鈍色を著るより及んぬハ是欵といふ注

親王宣旨抄書ヤリ

同書云文治五十一十九同記云高倉院宮可被下親
王宣旨云々宣下御名字云々書壇紙一枚云々其書様
守貞 惟明 已上為親王と兄ゆ件の二のは名並びて各
一行ふまて已上云々ハ又一行ふてかり下しておわり

十を修くとんや
文選のちき訓ふ十を修くとよまなり下はつハ二つ二つあどのつらなり

親王三國大守小任せしめし

類聚三代格小太政官符應親王任國守事上給國常陸國
上野國右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原真人夏
野奏狀傳設置八省職寮相隸百官守職庶務俱成一事
有闕万事皆緩今親王任八省卿此地望素高不得就
職無知碎務仍官事自懈政迹日蕪非是庸愚之所致因
地勢使之然也凡官人遷代必署解由至有欠物不免償
物居此之費見其如此望請點定數國為親王國迭任彼
國身留京都意欲居京官者一兩人將聽若有守闕者不
補他人其料物者納置別倉支無品親王之要伏聽天裁

者正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫長峯朝臣
安世宣奉勅依奏但件等國守官位卑下宜改定正四位
下官以為勅任号称大守限以一代不可永例天長三年
九月六日

諸王の事

繼嗣令云凡皇兄弟皇子皆為親王亦同女帝子以外並為諸
王自親王五世雖得王名不在皇親之限亦同文德實錄云齊
衡三年四月甲午彈正臺奏五世王者雖有王号非皇親
之限其朝服色宜依王臣位階從之三代實錄云貞觀四
年四月十二日下詔令參議已上各論時政之是非詳中世

俗之得失云々。先是諸王自二世至四世賜夏冬衣服不限人數隨年數符出多少賜之或至五六百人是時載簿進官者四百餘人。豐前上疏曰諸王給服人數不定徒費帑藏何無紀極望請以當時所在為定數隨闕補之不聽。輒過從之。豐前上疏曰豐前王の人の名心又同十二年二月廿日公卿奏請減諸王季祿兼立給祿定額曰云々。今府帑稍空貢職少入當停諸王之祿存救弊之計者云々。但專停之則似疎皇親全給之則可闕國用云々。又王氏蕃昌萬倍曩日計其祿賜所費難支伏望當時預祿者四百二十九人為定負云々。奏可。元慶四年十月廿七

日免攝津國河邊郡人九世從七位下別原公福貞云々等五戶課徭福貞等自言云々。謹檢天長九年十一月十五日詔書備夫王氏者王号乃止於五世資蔭不過六世云々。宜七世以下計數至于五世課役蠲除其既賜姓者不論先後一依王蔭計世容之亦同此例者云々。望請同被蠲除許之。件の天長九年乃詔書小王号乃止於五世。續後紀。永和八年十年十四年嘉祥二年。王七世某王の名字考ふ。箱根山を箱荷云々。考ふ。

記畧云延曆廿一年五月甲戌廢相模國足柄路_{ハコ}菅荷_{ハコ}途_ヲ以_テ富士燒_テ碎石塞_リ道也同廿二年五月丁卯廢相模國菅荷路復足柄舊路_ト也菅荷ハ今箱根_ト也

花の宴

類聚國史云弘仁三年二月辛丑幸神泉苑覽花樹命文人賦詩賜綿有差花宴之節始於此矣_ト同六年二月庚午幸神泉苑花宴命文人賦詩侍臣及文人賜綿有差

芳宜花の宴

續後紀云養和元年八月己卯朔庚寅上曲宴清涼殿号曰芳宜花_キ譙賜近習以下至近衛將監祿有差_ト同十

一年八月辛己朔天皇御紫宸殿覽芳宜花宴老臣皆有復古之歎日暮賜五位己_ニ衣被有差皇_ノ贈_ル大_ニ天皇

佛名乃_ト法_ト

同紀云養和五年十二月乙酉朔己亥天皇於清涼殿修佛名懺悔限以三日三夜律師靜安大法師願安實敏願定道昌等_ト為導師內裏佛名懺悔自此而始_ト也_ト小一代要記云淳和天皇の_ハ云_フり_テ始_メる_ト也_ト公事根源云_ハ卷五_ノ年_ノ云_フり_テ始_メる_ト也_ト三代實錄云貞觀十八年六月廿一日丙寅一萬三千佛像二十九鋪各廣五幅高一丈六尺分置東海山陰南海三道諸國國別一鋪先是元

興寺僧賢護申牒稱先師故律師傳燈大法師位靜安兼
和年中奉勸國家禮拜佛名始行內裏漸遍人間遂詔諸
國並令勤修云々望請分置內裏及諸國每至御願懺悔
之會展張真容於前修之許其所請焉

同紀小兼和七年四月丙午朔癸丑請律師傳燈大法師
靜安於清涼殿始行灌佛之事

更衣

同紀小兼和九年正月丙申朔戊戌天皇朝觀太上天皇
及太皇太后宮於嵯峨院云々是日詔授從五位下秋篠

朝臣康子正五位下无位山田宿祢近子從五位上並太
上天皇更衣也云々此の更衣といふ物をいつこの代乃る
令少妃二負右四品以上夫人三負右三位以上嬪四負
右五位以上宮人と云々中若かりこねるはさうは号を絶
下大うの妃夫人小つをほごねるを女御と云々嬪小あ
るを女更衣と云々後三代實録六の巻小光孝天皇更衣といふ
云々仁和三年の勅以更衣從五位上藤原朝
臣元善為女御中納言從三位山陰之女也云々

女御

位下藤原朝臣泉子御巫無位榎本連淨子等向攝津國
八木嶋

大歌所

同書云々從四位下治部大輔興世朝臣書主卒云々
弘仁七年云々能彈和琴仍為大歌所別當常供奉節會
三代實錄貞觀七年十一月十五日壬辰天皇御紫宸殿
賜宴群臣大歌所五節舞如常儀云々大歌八續紀小
天應元年十一月丁卯御大政官院行大嘗之事云々已
已宴五位已上奏雅樂及大歌於庭云々江次第の五節帳
臺試條小大歌小歌云々

天下の諸神おしめて正六位上小叙云々
文德實錄小仁壽元年正月甲戌朔庚子詔天下諸神不
論有位無位叙正六位上内國云々

同紀小齊衡元年四月遣傳燈大法師位智戒興智真秀
傳燈法師位明昭玄永傳燈滿位僧基藏基秀向七道諸
國名神社轉讀般若祈民福也同三年九月請僧於
賀茂松尾大神社讀金剛般若經限三日訖天安元年
五月日事なり云々天安元年
漢なり天神の云々天安元年

常陸國大洗磯前神

同紀小齊衡三年十二月戊戌常陸國上言鹿嶋郡大洗磯前有神新降初郡民有者海為塩者夜半望海光耀属天明日有兩怪石見在水次高各尺許體於神造非人間石塩翁私異之去後一日亦有十餘小石在向石左右似若侍坐彩色非常或形沙門唯無耳目時馮人云我是大奈母知少比古奈命也昔造此國訖去往東海今為齊民更亦來歸天安元年八月乙丑朔辛未在常陸國大洗磯前酒列磯前等神類官社十月乙丑朔己卯在常陸國大洗磯前酒列磯前兩神号藥師菩薩名神神名帳小

常陸國鹿島郡大洗磯前藥師菩薩神社名神那賀郡酒

列磯前藥師菩薩神社名神と云ふ藥師ハ云々ト訓べト

藥の神乃よりしうけやうといふ佛のなをらねあをらじし酒列磯前の社ハうけ二柱のうちを分ちあけねすべし他社ハハをまき件之二社おのく一座おまじしてこの大洗磯前のうけりハちり十里ぞうりかむとて石乃おきあをを今と身とふ一板のまけ磯ふくらね石のよみは正月の十六日小民ぞと取つてのふ用ふしうけりそねしと此二柱おけねしを民ふけりまをさといひつてくちりとものおんりりき

之運隨動而差差而不已遂與曆錯者方今大唐開元以來三改曆術宋朝天平以降猶用一經靜言事理實不可然諸停舊用新欽若天步詔從之之乃之此時之件之宣明曆之用以之として之ち之り之て之頃享之る之八百餘年改之る之也之

同紀小貞觀五年五月廿日壬午於神泉苑修御靈會勅遣左近衛中將從四位下藤原朝臣基經右近衛權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行寺監會事王公卿士起集共觀靈座六前設施几筵盛陳花菓恭敬薰修延律師慧達為講師演說金光明經一部般若心經六卷命

雅樂寮伶人作樂以帝近侍兒童及良家稚子為舞人大唐高麗更出而舞新伎散樂競盡其能此日宣旨開苑四門聽都邑人出入縱觀所謂御靈者崇道天皇伊豫親王藤原夫人及觀察使橘逸勢文室宮田麻呂等是也並坐事被誅冤魂成厲近代以來疫病死甚衆天下以為此災御靈之所生也始自京畿爰及外國每至夏天秋節修御靈會往々不斷或禮佛說經或歌且舞令童州之子觀粧馳射膂力之士袒裼相撲騎射呈藝走馬爭勝倡優曼戲逐相誇競聚而觀者莫不填咽遐邇因循漸成風俗今茲春初咬逆疫百姓多斃朝廷為祈至是乃修此會以賽

南面皇城門是謂朱雀門云々然則以其在南方故謂之朱雀乎又稱羅城門者是周之國門云々其義未詳但大唐六典注云自大明宮夾東羅城復道云々蓋此羅列之意乎從五位上行大學博士兼越前權介菅野朝臣佐世云々等議言云々即雉魯之天災猶不改名今此應天門既是人火仍舊謂之何必更改但名曰應天朱雀羅城之義經典為无見焉此の文もあはれず印本中々脱しり今ハ一ッ乃写本小依て引了此もろ印本ハ二印ハ脱しり

同紀小元慶二年詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺列

於定額沙門三修申牒傳云々仁壽年中登到此山即是七高山之其一也云々

同紀小元慶三年九月廿五日云々是夜鴨河幸橋火燒斷大半云々仁和三年五月十四日云々是日始置守韓橋者二人以山城國倭下充之云々

同紀小同六年二月廿八日天皇於弘徽殿前覽鬪雞云々

同紀小同八年九月朔遠江國濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺貞觀四年修造歷二十餘年既以破壞勅給彼國正稅稻一万二千六百三十束改作焉

同紀小同八年九月朔遠江國濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺貞觀四年修造歷二十餘年既以破壞勅給彼國正稅稻一万二千六百三十束改作焉

遍照僧正七十賀正宴

同紀小同八年九月朔遠江國濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺貞觀四年修造歷二十餘年既以破壞勅給彼國正稅稻一万二千六百三十束改作焉

夜談賞太政大臣左右大臣預席焉

夜談賞太政大臣左右大臣預席焉

